

「うわ～きれい…」コレンジャー6月の活動で、ともに整備しているビオトープの動植物調査に行った時のことです。林床一面に落ちていた白い花に、子どもたちと見とれていました。白い花の正体はエゴノキの花で、花びらの一片一片が散るのではなく（離弁花）、花は根元でくっついて筒のようになっていて（合弁花）。だから、美しい花の形のまま地面に落ちるのです。花びらが決まった数ではないことも不思議な魅力です。花が散る前、下向きに咲いたくさんの花を見上げる美しさもありますが、林床の花じゅうたんは、私にとって季節を感じる自然風景の一つです。

エゴノキは、日本では北海道から沖縄まで広く分布し、山地や里山に普通に生える落葉広葉樹なので見たことがある方も多いと思います。名の由来は、果実を食べるとえぐいため、エゴノキになったといわれています。えぐみの成分はサポニンで、昔は若い果実を水と振り混ぜて発泡させ、洗剤として利用していました。エゴノキしてみると、種子が成熟するまで虫や動物から守る大切な成分です。そのサポニンを含む果実は、熟すと破けて茶色い種子が目立つようになります。これは、成熟した油脂たっぷりの種子をヤマガラにアピールしてい



ヤマガラがエゴノキの種子をくわえている様子

るといわれていて、理由は、食べ物が少ないくなる時季のためにヤマガラが堅い殻に包まれた種子を様々な所に隠して蓄えることにあります。自ら種子を遠くへ運べないエゴノキは、ヤマガラの行動を利用して種子を四方八方に隠して（植えて）もらい、食べ残されるチャンスをつかむためにアピールしているのです。

今秋、ヤマガラがエゴノキの種子をせわしなく運ぶ姿や、両脚やクチバシを器用に使って食べる姿を観察したい方は、今夏に、卵球形に膨らんだ緑白色の果実を見つけておくことをお勧めします。見つけたその木は、エゴノキとヤマガラが互いに進化してきた結果、そこにあるのかもしれませんが。

（加瀬澤）